



記念講演 「支縁社会をつくる」

講師

坂東 眞理子 氏

皆様、おはようございます。ただいまご紹介いただきました坂東眞理子でございます。今日は大変素晴らしい各界の方たちが参加しておられる、この国際ロータリー大会の地区大会でお話をさせていただくこと、石井ガバナー、またコロマさんをはじめたくさんの貴賓がおられる中でお話をさせていただくことを大変光栄に思っております。

今日は「支縁社会をつくる」という題で話をさせていただきます。この3月11日の東日本大震災を機会に、今までの日本のあり方を見直さなければいけないのではないかと思います。あるいは高度経済成長の時代、経済大国の時代、失われた20年の時代といろいろあるわけですが、1つ新しいステージに入ったと感じている方が多いのではないかと思います。

そして、皆様方が青少年の育成に力を入れたいと考えておられるということ伺いましたが、改めて私はここで、私たちは次の世代に何を期待しているのだろうか、どういう人間を、どういう人を社会へ送り出そうとしているのか、育てようとしているのか、これを考えなければならないのではないかと思います。

今日の私の話は、これから必要とされる人はどういう人なのかを、全体の流れの中でまず考え、次の段階で、具体的に個人個人どういうことを考えて人を育てなければならないのかという二段構えで話をさせていただきたいと思います。

まず一番初めに、私たちが今育てようとしている人たちは、まさに21世紀を担う人たちであるということです。もう20世紀の前半のモデル、20世紀後半のモデルは通用いたしません。20世紀前半、私たちはどういう子どもを育てたいと思っていたかと言えば、男の子ならば立身出世です。頑張れ、頑張って偉くなれと、そして経済的にも豊かになりなさい、自分で仕事を興すのもいいし、大きな会社に入るのもいいけれど、とにかくしっかりと出世し、力を持って、そして経済的にもゆとりのある暮らしを手に入れる、それが子ども、特に男の子に期待されるあらまほしき生き方だったのではないかと思います。女の子は、良妻賢母です。そして頑張る男性たちを家庭にあってしっかりと支える、このパターンが期待される生き方、期待される人生だったと思います。

前の江戸時代、あるいは明治あたりぐらいまでは、知足安分と言うのでしょうか。足ることを知る、自分の分に安んじていればいいんだ、立身出世なんていうような野心を持たずに、ちゃんと自分の親から伝えられた仕事をしっかりとやっていたらいいのだという時代に比べると、生



き方が変わりました。人生観がかわり、行動が変わったのだらうと思います。そして、そういう人たちが高度経済成長を一生懸命成し遂げた、引っ張ったと言えるのではないかと思います。

しかし、その次の段階、戦後の貧しさから抜け出して、一通りの豊かさが手に入るような時代になると、男の子には今さらどんどん出世しろ、偉くなれ、金持ちになれなどは期待しなくなり、自分の適性を発揮できるような生き方がよいのではないか、女性で言うと、周りの人から愛される生き方、これが一番幸せというように考え方が変わったような気がいたします。

戦後のベビーブームに生まれた私たちの世代は本当に頑張りました。もっともっと豊かにならなければならないと思って頑張りましたが、自分たちの子どもには、大成功を目指すよりも、自分の適性を発揮する、自分の能力に合うような生き方をする方が幸せではないかと考えた世代です。

それでもきちんとやるべきことはやらなければいけない、学校は卒業し、しっかりとしたところに勤めるということは前提にあった上で、自分の能力をその上で発揮する、それがよいのではと思っておりましたが、今の子どもたち、今の若者たちは、幸せな人生というのは、自分の好きなことをするのだ、個性を大事に、自分らしく生きたいと、そういうように考える人がとても増えております。

好きなことをしたい、自分の個性を十分に発揮したい、とにかく「自分らしく、自分らしく」という声がこだましているような気がします。

大学生を見ていると、「私は自分らしく生きられればそれでいいんです」というような子が大変多いです。「自分らしく」とは何であろう、さらに聞きたくなくなってきます。

でも、現実には好きなことをする、個性を大事にする、個性を発揮する、自分らしく生きるということは、そう生易しいものではありません。そして現実には、好きなことをしようと思っても、自分の場が見当たらないで、ニート(NEET)、Not in Education, Not in Employment, Not in Training、雇われてもいない、勉強もしていない、訓練も受けていないというニートと言われるような人たちや、フリーターの若者が増えています。フリーターは仕事は変わるにしても、アルバイト的な仕事でも働いているのでニートよりもよいと言われるのですが、そのような不安定な仕事をして、でも自分らしく生きている若者が増えています。

実は、私は下北沢という東京の繁華街に近いところに住んでいるのですが、下北沢近辺には自由に生きている、自分らしく生きている、そういうような若者がたくさんたむろしております。髪の毛も黄色や茶色だけではなく、緑色がいたり紫色がいたり、まさに色とりどりです。そして、ひきこもりや青少年犯罪に走るような若者も、この豊かな社会の中でいまだになくなりません。むしろ増えているくらいです。

そして一方で、晩婚化あるいは非婚化、そして少子化が大変な勢いで進んでいます。日本の少子高齢化と一口に言いますが、私は高齢化はとてもめでたいことだと思います。女性の平均寿命が86歳を超え、男性が79歳を超えています。これは人生50年のイメージからすると長生きし過ぎではないかという人もいますが、豊かさの表れ、医療水準の高さの表れ、衛



生水準の高さの表れですので、本当に誇ってよいと思います。しかし、長生きをする一方で、若い人たちがどんどん生まれて育ってきてくればよいのですが、今それが機能なくなっています。

その少子化の原因は、いろいろありますが、昔だったらたくさんの子どもを産んでおかなければ死ぬ可能性が高いので、そのリスクヘッジのために子どもの数を増やしておく、あるいは男の子でないと後継ぎになれないので、男の子が生まれるまで頑張る、実はこの慣習は、アジアではまだ残っております。

少し余談になりますが、韓国あるいは中国あたりでは、やはり男の子の方が好まれますので、生まれてくる時にもうかなりの人工的な選別が行われているのではないかという話もあります。

日本で子どもを育てるのにはコストがかかります。日本では政府が教育にあまりお金を出さず、家計、我々が自分たちの身銭を切って子どもたちにいろいろな習い事をさせます。私立の学校へ行かせます。特に私立の大学は、親御さんが負担して下さる授業料によって大学が支えられています。経済的に子どもをあまりたくさん持てないのが実情です。

それと同時に、若い人たちが結婚を遅らせる晩婚化、そして非婚化、結婚しないという人が増えています。女の人が結婚しないようになったから困るのだというように考えられる方が多いかもしれませんが、実は女性は晩婚化で、男性が非婚化です。

昨年10月の国勢調査の結果を見ますと、女性は20代の後半、25～29歳で未婚という人が6割を超えています。これはもう大変な事態だと思うのですが、30代になると結構結婚しております。そして40代前半になると6.8%、それでも高いことは高いです。

問題は男性です。男性で40代前半で未婚、結婚したことがない人が27%、40代後半になっても22%、恐らく一生非婚、生涯独身という人が十数%、2割を切る程度はいるのではないかとされています。

高度経済成長が始まったころには、男性で生涯独身という人は1.7%でした、もう10倍を超えています。女性たちに早く結婚しなさいという前に、男性たちにぼやぼやしないで、しっかりちゃんと結婚しなさいと言わないと、この少子化の流れはとどまらないのではないかと思います。

結婚した人たちは、先日のデータによると1.96、大体平均2人ぐらいいはお子さんを持たれるのですが、晩婚、非婚、特に非婚で子どもを持たないゼロという人たちが増えると、平均で1.36という数値になってしまいます。ちゃんと結婚できるというような社会をつくらなければいけないと思います。

また、もう一つの結婚をめぐる状況としては、離婚が増えております。4組に1組くらいが離婚するというような状況で、晩婚で結婚してやれやれと思っていたら、今度は離婚などというようなことにもなりますので、安定した家庭をつくる力を持っている人が、特に男性が少なくなっているのではないかとというのが1つの大きな課題です。

もちろん女性もそうした力が必要で、今までの日本の結婚、日本の家庭は、女性たちが頑張る何とか維持してきたわけですが、その力がちょっと弱くなってきています。男性もそこを全く女性に支えてもらうだけではなく、一緒に家庭を維持していくのだというように考



えを変えなければならなくなっているのではないかと思います。

そして今、こうした状況の中で、どうしたら21世紀の社会を維持していけるのかということを見ると、やはり一人一人が孤立している、人とつながらない、自立はしているかもしれないが孤立しているという状態ではなく、人間同士が支え合う、助け合う、こういったようなことにもっと重きを置かなければならなくなっているのではないかと思います。

実は女性たちは、この1世代、2世代の間に経済的に自立しよう、社会的に自立しよう、精神的に自立しようと、そういうことを強調してきました。戦前の民法、戦前は女性たちは自分で自立することができませんでした。財産の処分をするのにも夫の許しを得なければいけない、どこに住むか、どういう仕事をするか、誰と結婚するかも家長の許しを得なければならないというような位置付けでした。

その後、憲法が変わり、民法が変わり、男女共学になり、女性たちも働けるようになり、自立の環境は整いましたが、実は心の中で家族に依存する、夫に依存する、子どもに依存するという人が多かったので、ちゃんと自分で責任を持って生きていかなければいけない、自分のことは自分で決めなければいけない、人のせいにはしてはいけないという意味で自立が大事だということが強調されました。そしてそれは自立ではなくて孤立につながりました。

私は好きなことをします、人の世話にはなりません、人に迷惑をかけなければいい、どうもそういう方向に行ってしまったのではないかと思います。でも、それはとても寂しい話で、そのような孤立した人が増えると、これは「孤族社会」です。孤立の「孤」、孤独の「孤」。あるいは縁のない無縁の人たちがつくった社会、「無縁社会」、このような言葉が言われるようになってきております。

私たちはもう自立を目指すところから一歩進めて、新しいステージとして支え合うことができる力を持った人を育てるということを考えなければならなくなっているのではないのでしょうか。自立が行き過ぎたことによって、これでよいのだろうかという時に、たまたま3.11の大震災が起きました。

この大震災の直接的な影響の1つとして、例えば未婚の女性たちが「結婚したい」「結婚しようと思う」という人が増えたそうです。これはとてもよいと思います。未婚の女性たちが結婚したいというのは結構ですが、はて相手はいるのか、男性たちはどうなのかちょっと心配になります。その孤立、自立していることができるのは、豊かな社会だから、平安な、穏やかな社会の時には自立している、孤立している状況でも生きていけますが、いざとなったら、大災害に襲われた時には、社会がひっくり返るような時には、やっぱり誰か支えあう人がいてくれた方がよいという認識を持つようになったのではないかと思います。これは本当にとってもよいことだろうと思います。

そして私は、こうした支え合いというのは、自分で決めないで依存する、誰かに頼ってしまう、誰かに経済的にも精神的にも任せてしまうというのではなく、自立をすることが前提だと思います。自立するだけの力を持ち、人の世話をすることができるのが、支え合いには必要です。人の世話にはなりません、人に迷惑かけませんで終わるのではなく、自分が人を世話をする、人を支える、そういう力を持った存在になるということが、これからの日本人には必要で、期待



されると言えるのではないかと思います。

無縁社会ではなくて、支縁社会をつくれる人を育てなければならないのですが、自分が豊かな生活をするんだ、自分が権力を目指すのただけではなく、むしろその自分が持っている力を周りに活かしていこう、周りの人を助けるために使っていこう、そういう方向へひとつ日本の社会のステージが変わったのではないかと考えております。

これは日本だけではなく、成熟した社会ではみなそういう傾向がありますが、日本とアメリカ、あるいはヨーロッパ、アジアの国々、それぞれ経済的な発達の段階が異なりますので、重点の置かれ方が違うと思います。

また経済成長真っ最中の中国では、1960年代の日本同様頑張っって成功しようという雰囲気が大変強いです。またアメリカは、この前亡くなったスティーブ・ジョブズがアメリカンヒーローの典型だと思いますが、好きを極めて大成功をするというようなことを称賛するような雰囲気があります。

日本は日本らしいジャパニーズ・ドリーム、日本人としてあらまほしき生き方というのを、やはりこれから考えていかなければいけないのではないかと思います。震災の時に日本の被災者の方たちは、非常に忍耐強く、我慢強く、そして礼儀正しくいろいろな配給や何かの時にもきちんと列を乱さず、暴動はどこにも起きませんでした。日本の民度の高さを世界中から称賛されたわけです。それは東北だから、地域コミュニティがまだ機能している東北だったからそうであったのであって、もし東京や、大阪でしたら、あのようになんかきちんと行動できたろうかという声もあります。三重県や岐阜県の人たちの場合は全くその心配はないだろうと思います。

やはりそうした地域がある、縁のある社会が周りにある、一人一人が孤立していない、無縁ではないということが、いざとなった時に大変大きな強みを発揮するのではないかと思います。

そういうことを幾つも幾つも繰り返していても時間がなくなってしまいますが、私はそうした中で今一人一人の子どもたちを育てる時に何を考えなければならないのだろうかということを具体的に次に話をさせていただきたいと思います。

子どもたちを育てる上で、何が何でも絶対健康が一番大事です。今、子どもの健康というとすぐに放射能汚染、それから子どもたちをどう守るかという話になってしまいますが、その問題以前にきちんとした生活習慣を確立する、これが大事なのではないかと思います。

放射能に関して言えば、私は正直な話、今不安に駆られてちょっと騒ぎ過ぎているのではないかと思います。この放射能を30年、50年浴び続けたら健康にどういう影響が出てくるのかというのは、正直なところよく分かりません。

この間も世田谷区、私の大学のすぐそばで放射能の数値がとても高いところがあり、ホットスポットではと大騒ぎになりました。その家の床下に50年以上も放射能があり、その放射能を浴び続けた女性は92歳まで生きておられたというような話を聞くと、訳が分からなくなります。本当に訳が分からないのでみんなが不安になるのではないのでしょうか。

日本の科学技術に奮起してもらい、できるだけ早くそうした放射能を除去しなくてはなりません。日本人というのは、こういう問題がある、これを解決しろと言われると、必ず答えを見



出します。四日市の公害もそうであったと思います。高度経済成長の時には大変だと大騒ぎしましたが、今や日本は世界一の環境技術の国です。

恐らく放射能に関しても、日本は世界一の放射能除去の技術をもって、それを売りにできるような時代になるのではないかと、私はこの問題に関しては割と楽観的な考えです。それよりもむしろしっかりと生活習慣、朝きちんと起きる、きちんと清潔に顔を洗う、シャワーを浴びる、お風呂に入る、清潔を保つ、そしてバランスの取れた食事をとる、体を動かす、スポーツを一生懸命する、そういったことの方がよほど大事だと思います。残念なことに今の若い人たちは、そうした生活習慣を身に付けるよりも、自分の好きなことをした方がよいというように考えている人がたくさんいます。

夜更かししてでも自分の好きなことをやりたい、インターネットサーフィンならば時間のたつのを忘れてしまう、そういう生活をしている子たちがとても多くて、そして朝起きられない、朝起きられないから登校しない、登校できないとひきこもりになり、ニートの道まっしぐらとなってしまう。

最近の親は、まあ子どもが好きなんだから、一生懸命好きなことをしているのに、あまりあれこれ口出しするのはやめようと、これが物分かりのよい親だということに考えていると思いますが、むしろきちんと寝なきゃだめだよと、人間は12時前に寝た方が健康にいいんだよということを口を酸っぱくして繰り返し言わなければいけないと思います。

皆さんはどうだったでしょうか。私は子どものころ、受験勉強をすると、親はもう早く寝ろ、早く寝ろって口うるさくって、そんなに楽しい勉強ではなかったのですが、眠れと言われたらかえってやらなければいけないと思って一生懸命やったような気がします。

好きなようにやりなさい、幾らでもやりなさいと言われると、かえって一生懸命受験勉強もしないのではないかと思います。本当に夢中で、やりたいことがある時は親に隠れてでもやります。親の役割としては、社会の役割としては、きちんと早く眠る、きちんと早く起きる、これが健康づくりのために、社会を健全に維持していくためにはとても大事な生活習慣だということを自信をもって伝えるということが必要だと思います。

節電の関係で、東京でも24時間営業のコンビニエンスストアが少し営業時間を短縮するということがありました。私はそれが正しいと、健康な生活に向いていると評価します。本当に24時間オープンが必要なのかということも含めて考えなければならぬと思います。

食事に関して言えば、放射能の問題はさておき、添加物などそういった問題もありますが、体によいものではなく、好きなものを食べる、無理強いをしてはいけない、子どもたちの好みのものであげよう、これが母親の愛情である、親の愛情である、このように誤解しているのではないかと思います。

好きなものを食べさせるのはたまには必要だと思います。誕生日のお祝いの時とか、あるいはいろいろな節目のお祝いの時などに好きなものをつくって喜ばせるというのは、とても家庭生活の上で大事だと思いますが、いつもいつも好きなものを食べさせる必要はないのではないのでしょうか。それよりも栄養のバランスのとれたものを、健康によいものをきちんと食べることが大切です。あるいは、特にこれは男の子に必要なのですが、あてがわれたものを食べるだ



けではなく、自分で用意することができ、自分で後片付けをすることができることが、私は今、食育の大事なアイテムではないかと思っています。

食育というとバランスよく食べる、よく噛んで食べるというようなことばかりが強調されています。栄養の中身も大事ですが、いかに食事を用意をするのか、そして食べた後、最後まで片付けることまで含めてしっかりとした食生活ができるという力を身に付けるのが食育なのではないかと思います。

特に女の子も男の子も、家の手伝いをするよりも、お皿を洗うよりも、料理するよりも、受験勉強しなさいというのは、その子が将来大きくなった時に、健康な生活をする力を奪っているのではないのでしょうか。子どものころはとにかく健康に生き、その生きる力をしっかり身に付けるということが、とても大事だと思います。

その意味でスポーツ、体を動かすということもとても大事です。この車社会で歩かない生活、これは特に地方で深刻なのではないかと思っています。

東京では地下鉄やJR線、私鉄があります。駅へ行ったら階段を上ったり降りたりしなければなりません。それから道が混み過ぎているので、決められた時間に行こうと思うなら、公共交通機関を利用した方がよいです。車を利用していると何時になるか分かりません。

でも、地方に行くと本当に車が当たり前で、子どもたちも車で送り迎えとか、あるいはごみを捨ててに行くことまで車を使うという話を聞きますが、もっともっと日常生活の中で体を動かすという習慣が必要だと思います。

そうしたことを心掛け、大きくなったら、たばこに手を出さない、麻薬は怖いということをしちんと教えなければならないと思いますが、何をすることも健康が一番ということは、本当にたたき込まなければいけないと思います。

女の子の場合は、私どもの大学ですと、拒食というのでしょうか、食べない子が本当に多くいます。細くなければ魅力的じゃない、洋服が似合うためには、見た目がよいためには、格好よくあるためには、太ってはいけないのだと、もう強迫観念にかられています。それで食べるものも食べないという子がとても増えています。

本当は健康が一番美しいということを生懸命言わなければいけないのですが、私たち女性がそのようなことを言っても、女の子たちは聞きません。ぜひお父さんから、あるいは職場の上司から、女性は健康が一番魅力的だということ言ってもらわなければ、なかなか若い女の子のやせ願望というのは収まりません。若い男性から言ってもらった方がもっと効果があるのかもしれませんが。そうした美に対するスタンダードというものも、健康という視点から見直さなければならないのではないかと思います。

日本は中高年の人たちの健康状態、栄養状態はとても良好です。だからこそ長寿化が進んでいるわけですが、若い人たち、15歳から20歳、20歳から24歳の人たちは、男性も女性も栄養が偏っています。あるいはスポーツが、体を動かすことが行われていません。男性は30代でも同様です。そのような状況を解決するために、もっと言わなければならないなと思います。

それと同時に、体の健康だけではなく心の健康も重要です。先ほどの拒食や好きなもの



け食べるというような人たちは、人と関わっていけない、小さな集団の中でどう思われるか、友達の中から浮き上がらないように、友達と仲良くできるように、それにはものすごく気を使っているのですが、そうではない人たちがうまく関係が結べない、親なんてどうせ私のことなんて分かってくれない、先生なんてというような考え方をする若い人が、大変多くなっています。

どうしてでしょう。親は本当に一生懸命子どもを育てたはずなのに、それが伝わっておらず、受け止める力もありません。私はこの理由の1つは、あまりにも親が子どもたちを大事に大事にし過ぎたせいもあるのではないかと考えています。苦勞をさせない、嫌な思いをさせない、嫌なものは食べさせない、嫌なことはさせない、疲れたらすぐ車に乗せてやる、もう本当に大事に大事に育てられた子たちが、それを感謝するのではなく、それが当たり前だと思って、それ以上どんどん望んでいくようになりました。そして、少しでも思うようにいかなかったら、「親は私を理解してくれない」「先生は私のことなんか全然分かってない」というようになってしまいます。

期待水準が高くなり過ぎているのです。世の中、自分の思うとおりにはいかない、誰でも自分のことをとても愛して理解して大事にしてくれるわけではない、その中で大事にしてくれる、その中で世話をしてくれることは本当に「有り難い」ことなのだ、普通ではないことをやってくれる、「有り難い」ことなのだと認識させるのが親の役目だと思います。大事に育て過ぎるとかえってありがたいという気持ちになりにくいのではないのでしょうか。

人間は豊かな中で次の世代をしっかりと育てるといことは難しく、また下手です。だから、「売り家と唐様で書く三代目」が出るのですが、日本全体としても昔は豊かではなく、貧しいので、親がいくら与えたい、世話をやりたい、学校へやってやりたい、いろいろ習い事をさせてやりたいと思っても、自分たちにお金がなく、それだけの力がないので、我慢させなければならなかった家庭が大半でした。しかし、今は大抵の親が、少ない数の子どものために、子どものためなら何でもやってやろうという気持ちで、どんどん与えています。みんなで甘やかしています。与え過ぎています。その結果、与えられることに感謝も喜びも感じない子どもたちが増えているのではないのでしょうか。

与えられるのは物だけではないです。食べ物だけではないです。愛情でもサービスでも、与えられ過ぎているというところがあるのではないのでしょうか。その結果、人に感謝する気持ちを忘れていて、与えられて当然ではなく、自分も与える側に回ろうとか、そうした気持ちを持ってない若い世代が育っているのではないかという気がいたします。

もっとも人と関わっていくためには、与えられ過ぎているのではなく、与えられなくて当然なんだ、与えられないのが当然、世話をしてもらえないのが当然、大事にしてもらえないのが当然、それなのにたまたま大事にしてくれる人がいたら、与えてくれる人がいたら、それは大変ありがたいことなのだという気持ちの持ち方にした方が、子ども自身も幸せだと思います。子ども自身もそれによって感謝の気持ちを持たずずっと幸せで、親が子どもに与えるのは当然だという考え方をしている子どもたちは、不幸になると思います。

先ほど晩婚化、非婚化が進んでいると申しましたが、結局相手から大事にしてもらいたい、



相手から理解してもらいたい、相手から支えてもらいたいだけで、自分が相手を理解しようとか、自分が相手を支ようという気持ちになれない人たち同士だったら、それはなかなか結婚はできません。恋愛だってできません。孤立まっしぐらです。無縁化、非婚化です。

そうではなく、もっともっと相手の力になってあげたい、理解したい、支えたい、そういう気持ちを持てるということが、大人になる時にとても大事なのだと思います。子どもの時はもらっているだけでもいいかもしれません。大人になってもそれをやろうと思ったら、不幸になるだけです。心の健康というのは、人と関わっていける力を持ち感謝することができるということと大変深い関わりがあるのではないかと思います。

そして同時に、自分を大事にする力、これも心の健康の上で大変大きな意味を持つと思います。今、若い人たち、自分の好きなことをしたい、自分らしく生きたいと言っている一方で、自分に自信が持てない、自分のことが好きになれないという人が、結構増えています。「どうせ私だめなのよ」「私なんか何やってもうまくいかないんだから」というように、投げやりになっている子も結構います。

それこそいつも大事に大事にされている中で1回挫折すると、その挫折から立ち上がれない、失恋すると、私はもう恋愛なんて大嫌いだ、もうしないというようになってしまう人が増えています。復元力と言うのでしょうか、挫折から立ち直る力がない、これも心が弱いからです。

失敗した、悔しい、でもしょうがない、まあ3日間布団かぶって寝ていようと。その中からまた少しずつその傷を癒して、自分で傷を癒して、自分で新しいことを見出して、いつの間にかその傷を忘れていく、これが私は強い心だと思うのですが、そういう経験を若いうちから積み重ねることが大事だと思います。

子どもの心を強くするためにはどうすればよいのでしょうか。私は、小さな挫折、自分で乗り越えられるような挫折を経験することだと思います。

小学校や中学校で、今は私たちの時代と違って成績も公表しません。駆けっこでもあまり順位を付けません。それでは自分は、駆けっこは下手だけれども勉強は好き、逆に勉強はあまりできないけれど、駆けっこはどんなものかというような等身大の自分に対する自信というのが持てません。悔しかった、負けた、ここで何とか取り返してやろうというような挫折から立ち直るというような経験もなく、まあ何となく自分は何でもできるような気持ちになってしまいます。それで大きくなってから挫折をする、失恋をする、入社試験に失敗する、そういったようなことがあるとがっかりきてしまって、立ち上がる力がなくなる、これは本当に心が弱いと思います。子どものころから失敗して立ち上る経験がないと、大人になってからいきなり強くなれと言っても無理です。

きっと皆さんの会社にも新入社員に怒ったら、その次の日からもう入社拒否になってしまった、そういう若い人が出てくるのではないかと思います。怒られたことがないのです、叱られたことがないのです、挫折したことがないのです、そういう若い人たちが、今どんどん増えています。

私ももう子どもには間に合いませんので、孫にはそのように育てなければいけないと思って



いるのですが、叱るのはエネルギーが要ります。「あ、いいよいいよ」って言っている方が楽です。何か子どもたちから好かれるような気がします。でも、それは子どものためにならないのです。ぜひ子どものころから家庭で、「それはおかしいよ。こうした方がいいんじゃないか」というように叱る育て方をして頂きたいと思います。それは彼らにとっては壁になります。反発されるだろうと思いますが、それによって子どもたちは心が強くなっていく、やりたいことがやれない、挫折をする、それからは上がる。そういったようなことが、これからの子どもたちをたくましく育てる上で絶対重要なのではないかと思います。

みんな本当に傷付きやすいのです。若い大学生を見ていると、そんなこと気にするのと思うほどに傷付きやすい女の子が多いです。男の子も多いです。今まで本当にもまれてないのだな、鍛えられてないのだなということ、よく感じます。

これから若い人たちを育てる時には、体の健康と同時に強い心を持つ心の健康ということがとても重要なのではないかと思います。そうして、心身の健康の上に、就業力、社会で役立つ仕事をする力を身に付けるということがあるのではないのでしょうか。

働くということ、それこそ自分の好きなことをやっているのが一番幸せなのだ、個性を發揮するのが幸せのだと教えていくことが大切です。お金のために働くことは嫌だというような考え方を持っている人が少しずつ増えていくことはとても悲しいことではないのでしょうか。

私は、学校を卒業してからずっと働き続けてきたのでそのように思うのですが、働くことで自分がみえてきます。もちろんお金をもらって働くという働き方のほかに、お金にならなくても働く、人の役に立つために、人を助けるために、社会を良くするために、働くという生き方もあります。もう一度コンセンサスとして国民全体が考えなければいけないのではないかと思います。

何かワークライフバランスとか、会社人間はだめだとか、一生懸命働く人をおとしめるような雰囲気、この20～30年強かったのではないかと思います。もっと遊ばなくては、日本人は遊ぶのが下手、それが行き過ぎて、働くことを小ばかにする若い人たちが増えてきているような気がします。これは本当にゆゆしいことですし、それこそ若い人たちが幸せに生きていけないのではないかと思います。

自分自身が好きなことをする、自分が気持ちのいいことをする、自分が豊かでぜいたくな暮らしをするだけで、人間は幸せになるものではなく、やはり人とつながること、自分の働いたことによって感謝される、人の役に立つことが働く喜びだと思います。

私は立派なものができる、法律ができる、よい報告書が書けた、そういうようなことが仕事の上で最大の喜びをもたらしてくれました。もちろん生きていくための収入も給料も、仕事によってもらっていたわけですが、給料だけではなく、働くことによって心の喜びをたくさん得ていたと思います。今、若い人たちが好きなことをしたい、自分らしく生きたい中で、その手応えを感じることができるのだろうか、ちょっと心配になります。

好きを仕事にする、極める、芸術家やスポーツ選手はそういう人です。それは大抵の場合、そこに行くまではもう本当に粒々辛苦、苦勞して、失敗して、その中から自分のセンスを磨き、



技を磨き、やっとその社会で認められるようなレベルになるのであり、ちょっと好きだから程度で一人前になるはずがありません。でも、そのかわりに、もちろんそういった苦勞を重ねて芸術家として、あるいはスポーツの選手として一芸に達した人は偉いと思うわけです。だからこそみな拍手喝采をするわけですが、誰でもできることではありません。

私は多くの普通の若い人たちは、芸術も楽しむことができる、スポーツも楽しい、でも、それだけではなく、社会と仕事を通じてつながる場を持っている、つながる手段、自分がやることが評価される、社会で役に立っているという場を持つということは、絶対必要であろうと思います。

そして、今まで日本は、そうした職場で若い人たちを育てるという点では、とてもよい社会だったと思います。学校にいる間は、礼儀作法もしっかりやらない、一生懸命勉強もしない、そういった若い人たちも、職場に入ってから、就職してから、上司に怒られたり、同僚にいろいろ言われたり、先輩から教えてもらったりして、職場で育てられました。それで一人前の社会人になった、一人前の職業人になりました。

そういう点では日本の年功序列終身雇用の仕組みは、大変効果があったのではないかと思います。残念ながら今は、そのようにして未熟な若者をしっかり一人前に育てようという上司も少なくなり、先輩や同僚もいません。会社自体にそれだけの余裕がなくなっています。

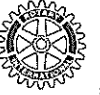
そして、とてもとても残念なことに、多くの若者は正社員の仕事に就けません。正社員ではなく契約だとかアルバイト、フリーター、派遣、そのような立場で働かざるを得ない人たちが増えています。そういう人たちは給料が低い、あるいは仕事の期間が限定されて不安定であるというだけではなく、一番の心の痛みは、会社でしっかり育ててもらい、教育してもらい、訓練してもらいということが少ないことです。

ですから、大学がもう一度しっかりと、教育の場として機能しなければなりません。若い人たちを鍛える、本気で勉強させる、本気で礼儀作用をしつけるというようにやらなければならないと思っています。

私の大学でも、授業が始まる前にみんなで起立して「お願いします」、終わったらまた起立して「ありがとうございました」とあいさつをする、居眠り、携帯、私語は厳禁、そのイエローカードを3回もらうともう単位を与えないなどというように、学校の中で厳しく学生たちを育てようと努力しています。

これは昭和女子大学は少人数の大学だからやれることで、例えば東京六大学のような、1学年に3,000人、5,000人と学生が入るようなところでは、なかなかそこまで目を届かせるのは難しいと思います。どうしたら大学教育をしっかりと機能させるかは、もう一つの大きな課題なのですが、職場で人を育てなければなりません。ぜひ皆様のような社会で責任のある場にいらっしゃる方たちには、心からお願いをしなければならないと思います。

今、正社員が減っていると申しましたが、女性はもう過半数が非正社員です。正社員は、もう4割余りしかいません。その女性の場合は、家庭との両立のために40代の主婦パートの方たちが大きな割合を占めています。男性は全体として言えば、まだ27～28%と3割を切っていますが、20～24歳、15～19歳という若年層を見ると、失業率も高いですが、非正社員の割合も高く、



正社員になっている人というのが6割余りいます。ひっくり返すと3分の1の若者が、学校を卒業しても正社員に採用してもらえないというような状況です。本当にこれを何とかしなければいけないと思います。

日本経済は、この75円などという円高の中で、厳しい状況が続くと思いますが、そのためにはコストや人件費を削減しなければなりません。若者を非正社員にするのはある程度は仕方がないことです。企業の論理としては、コストや人件費を削減するのは正しいのですが、このままでは次の世代が育たないのではないのでしょうか。

今まで日本では職場が一番の人材養成機関でしたが、それが機能しなくなってきました。正社員は増やせないとしても、非正社員でもしっかりと育てる、礼儀作用から口の利き方、あるいは仕事に対する態度、そういったようなものを全部正社員と同じようにしっかりと育てる、そのような対応が一番現実的だと思います。大学も「人材養成は職場に入ってから」などと言わず、大学のうちからできることを一生懸命教え、指導しなければなりません。「自由にどうぞ好きなことをやってください。大学4年間はモラトリアムです」というのではなく、本当にきちんと教育しなければならないと思います。そうしなければ社会で役に立つ人間にならない、働くことができない人間になってしまう、怠け者になってしまうと私は危機感を持っています。

そして私は、就業力と同時に、先ほども申しましたように、結婚力、あるいは家庭・家族力、家庭を持ってそれを維持する力を持つということが、女の子にも男の子にも必要なのではないかと思います。

昔と違って、今結婚してすぐに家にいる、一生家にいる、一生専業主婦でいるという女性はかなり減ってきています。そして、専業主婦の女性たちは、昔でしたら私は働かないから、働けないから、旦那さんに養ってもらっていると思っていたかもしれませんが、今は逆です。「私だって働こうと思えばいくらでも働けるけれど、あなたのために家にいてあげるのよ。子どものために家にいてあげるのよ」と。あなたを食べさせてるのは私なのよというように考え方が変わっています。女性たちの結婚に対する意識、家庭に対する意識は、とても変わってきています。

そして仕事をしている女性たちも、私たちの世代だと、「ごめんなさい。家のことがしっかりできなくて、手抜きが多くて、あなたの世話もできなくて、子どもの世話もできなくて」というように、何か肩身が狭くべこべこしていたような気がするのですが、これからの若い世代の女性たちは、「働くのは当たり前である。だからあなたも家庭の仕事をシェアするのは当たり前である」というように考え始めています。ですから、男性の方もそれに応えるように変わらないと、本当になかなか結婚できないのではないかと思います。

私が30年前アメリカに留学をした時には、今の日本と同じで、働く女性たちは職場で仕事をし家庭のこともやらなければならず、ダブルシフトで本当に大変だという声がとても強かったのですが、最近、アメリカへ行くと、そういう声は全然聞かれません。

また余談になりますが、実はアメリカという国は日本に比べると非常に遅れており、公立の保育所などは全然整備されていません。ですからお金持ちの人は自分で住み込みのナニーや看



護師さんなどを雇えますが、あまり稼ぎのよくない人たちは、とても高くて質の悪い私立の保育所に頼まざるを得ないというような状況で、本当に福祉サービスは充実していません。だから、夫と妻が本当に助け合って、2人で育児も家事もやっているというスタイルが当たり前になってきています。

アメリカもインフレや経済的にいろいろな問題があり、クリントン時代はまだよかったです。今また大変経済的に厳しく、子どもを大学にやる、家を買う時には、2人で働くのが当たり前。収入を2人で得るのだから、家庭の仕事も2人でやるのが当たり前というように30年の間に変わりました。

日本も今や少しずつ共働きが若い世代を中心に増え、若い世代を中心に家事をシェアし始めています。逆に家事をシェアする人でないと、男性は結婚できなくなってきています。「俺についてこい」というようなタイプの人の数は少ないですし、そういう人についていく女の人も少ないのではないかと思います。

それから、その家庭を維持するためには、そういう家事、育児をシェアするだけではなく、お互いに相手のわがままをやり過ぎず、柳に風と受け流す、何かぶつぶつ言っていたとしても真剣に受け取らないなど、成熟した心の対応が必要となります。子どものころから傷付きやすく、「ああ、あの人は私を愛してくれないの。理解してくれないの」などと言ってるような人は、なかなか家庭生活を維持していくということができないだろうと思います。

離婚が増えておりますが、離婚調停とか離婚に関わっている友人たちの話を聞くと、2人がうまくいかなくなると親にSOSを出してしまう、親が出てくることが多いようです。もう絶対これはうまくいかないという話を聞きますが、結婚までこぎ着けても心が大人になっていないと、旦那さんはじきに自分の母親の方にSOSを出して、奥さんの方も自分の母親の方にSOSを出してしまうようになります。

そしてまた、昔は結婚したら二度と家の敷居はまたぐななどというような家庭もあったわけですが、昔と違って今はもうウェルカム、帰ってこい、子どもの数が少ないんだから帰ってこい、ましてや孫を連れて帰ってきたら大歓迎というような家庭もありますので、離婚というのは減らないのではないかと思います。

しかし、それは私は離婚の一番の被害者は子どもだと思いますし、親の世代、離婚した当事者たちも、もっともっと人間として成熟をする必要があるのではないかと思います。離婚というのはいずれにしてもできるだけ避けるべきです。家庭内暴力を振るう大体9割方は男性なのですが、1割方は女性も家庭内暴力を振るう、そういった場合は仕方がないとして、お互いがきちんと相手の生き方、相手の価値観をできるだけ理解し合う、支え合う、こんなことを言ってもそうきれい事では済まないことは多いのですが、それができるのが大人であり、社会人であるという価値観を、もう少し浸透させなければいけないのではないのでしょうか。

自分らしさを貫くのだ。いや、自分らしい生き方をするのだということばかりを子どものころから奨励していると、それは結婚生活というのはいかにお互いに妥協すると言いますか、折り合っていかなければいけないところが多々あるわけですから、とてもうまくいかないのではないかと



なという気がいたします。

車間距離ではないですけれども、人と人との間の距離、人間距離を上手に取れることも必要です。特にこれは子どもがいなくなってから、中年になってその人間距離というのはとても大事だと思うのですが、そのような知恵、才覚というものも結婚生活を維持していく上で必要になってくるだろうと思います。

そうした家庭を維持する力、社会とつながる職業的な力、それと同時にその基礎になるパワーは、体力や気力だけではなしに、人間としていっぱい湧き上がるものがあるというのが、これからの社会が必要としている人なのではないでしょうか。

悪いこともしなければいいこともしない、人の迷惑にもならないけれども、人の世話もしない、ちんまりとしている、そういうような人ばかりがこれから増えてきます。おとなしい、優しい、いい子ばかりが増えてくるというのは、21世紀の日本にとってあまりハッピーではないという気がします。もっともっと元気で、もっともっと体が健康、体が元気、心が元気、そして勉強しようとか、頑張ろうとか、人の世話に一肌脱いでやろうとか、そのように生き生きとした気持ちを持っている子どもたちを育てる、こういうことが必要なのではないかと思います。

それと同時に、ぜひぜひ私は皆様をお願いをしたいことは、もう立身出世の時代ではない、能力を発揮して認められる、そういったようなことを求める時代ではない、お金で豊かになることを目指す社会ではない、でも、私はもう一つ、忘れていたことがあるのではないかと思います。「人格の陶冶」というとちょっと古過ぎて反発されるかもしれませんが、人間として立派になること、人間として魅力的な存在である大人を育てること、これをぜひ若い人たちに伝えなければいけないのではないかと思います。

人間として魅力的な人というのは、今はあまり顧みられてませんが、私はやっぱり正義感のある人、何が正しい、これは間違っているのではないかということをしちんと判断できる人、そして、自分自身が悪いことをしないだけでなく、きちんとよいことをするんだと自分を律することができる、こういう力を持つことが必要なのではないかと思います。

知識を持っている、専門的な知識を持っている、スキルを持っている、人に言いたいことが言える、コミュニケーション能力がある、世の中を生きていく上には、そうした力は必要不可欠です。それはもちろん子どもたちに身に付けてもらわなければ職業人にもなれません。家庭を維持することもできません。しっかりそうした専門的な知識やスキルは身に付けてもらわなければならないのですが、それだけでは不十分であり、それだけではなく、そのコアの部分、人間としての真ん中の部分に、ちゃんとした倫理観があるかどうか、いい人間になろうという意欲があるかどうか重要です。

自分に厳しく、自分をもっとよくしていかなければならない、そして同時にいろいろなハンディがあって、いろんな困難に出合って、苦しんでいる他人に対して優しい気持ちで接することができる、そして人が成功している、人がうまくいっていることをねたまない、足を引っ張らない、こういったことが人間として立派なのだと、こういう人にならなければいけないのだということを伝えなければいけないのではないかと思います。



今度の大地震でも、苦勞している人、困難に直面した人を何とか応援しよう、これが正義であると、お互い様ではないか、こういう分野では日本人の良さがとても発揮されているのではないかと思います。

うちの学生たちもたくさんボランティアに行き募金をしました。そうした困っている人は助けよう、これもとても立派な行動ですが、私は日本人でもう一つ考えなければいけないことは、うまくやっている人、成功している人をねたまない、足を引っ張らないということです。

「日本はリーダー不足である」それはよく言われますが、リーダーは育てなければ育たないのではないのでしょうか。リーダーの足を引っ張ってばかりいるのではなくて、ここをもう少しというアドバイスはあるにしても、全体として盛り上げていく、国にとってそれが大事であると同じように、会社においても、いろいろな社会においても、団体においても、リーダーを守り立てていこう、応援していこう、そういった生き方、考え方というもの、とても大事なのではないかと思います。

もちろんリーダーになる人たちは、高い識見を持っていてほしいし、人間として寛容で忍耐力があって、決断力と実行力があるというようにいろいろと期待するわけですが、例えそれが十分でなくても、もっともっと立派になってもらおうと周りが応援をすることが大事なのだと思います。

例えば子どもたちを育てる時にも、勉強ができない子、いろいろなハンディを持っている子、犯罪に走りそうな子、そういう子たちを応援しよう、かわいそうだと、それはみんな心が一致するのですが、才能がある子を応援しよう、頑張っって成功するようにみんなで応援しようという傾向が少ない気がします。

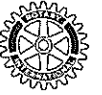
アメリカでは、スティーブ・ジョブズではありませんが、ベンチャーから大成功した人たちがたくさんいます。それはやはりベンチャーキャピタル、海のものとも山のものとも分らないが、あいつは成功しそうだから応援しよう、それを可能とする税制があり、いろいろなインフラも整っているのですが、そういう頑張っって成功しそうな若い人を守り立ててやろう、応援しよう、これも次世代を育成する上で重要な役割なのではないかと思います。

そういう可能性のある人たちに責任を持つ場に立たせ、仕事を成し遂げるようなチャンスを与える、こういうことをすると若い人は育ちます。本当にハンディキャップがあつてかわいそうなお子たちの応援だけではなしに、可能性のある人、将来リーダーになりそうな人をみんなで守り立てて育てる、これも私は皆様にぜひお願いしたい活動だと思います。

そういうようなことを言い出すと、もう切りがなくて、あれもしてほしい、これもしてほしいということになってしまいます。しかし、本当に改めてこの大地震の後の日本ということをお考えますと、私は放射能の問題については先ほども申しましたように、日本の技術、日本人が頑張れば、明確な解決すべき課題が与えられた時の日本人というのは強いと信じています。

しかし、日本人が弱いのは、何をしたいか分からない、何を指すべきか分からないという時に、みんながばらばらになってしまうところです。

政策のあり方、予算の取り方を考え、もらうことばかり考え、誰も自分が負担するというこ



とを考えないのかとか、そういった状況の中で、私たちはもう自分が得をすればよい、自分が幸せならばよい、自分が豊かならばよいというのではなく、次の段階の日本人は、お互いを支え合っていかなければ、この社会を維持できないのだ、それほど経済的にもいろいろな意味でゆとりはないのだ、だから助け合っていかなければならないのだということを、もう一つの国民的なコンセンサスとしていかなければならないし、子どもたちを育てる時に、若い人たちを育てる時にも、「人とつながる力を持っている」「人を支える力を持っている」ということを重要な目標、指標としなければならぬのではないかと思います。

ぜひ皆様、ロータリーの方たちがより素晴らしい日本のために、日本社会に支縁の輪が広がっていくように、今後とも活躍をされることを心からお祈りをいたします。今日はどうもありがとうございました。